



準天頂衛星2号機の打ち上げ成功（6月1日）

準天頂衛星「みちびき」2号機を載せたH2Aロケット34号機が6月1日午前9時17分46秒、鹿児島県の種子島宇宙センターから打ち上げられました。衛星は所定の軌道に投入され、打ち上げは成功しました。

この衛星は日本版の衛星測位システムを担う衛星で、続けて3号機が8月11日、4号機は10月ごろに打ち上げを予定しており、来年度から初号機とあわせた4機体制での本格運用が開始されます。4機体制では、24時間、365日、少なくとも1機の衛星が日本の上空に滞留し、衛星が提供する信号を利用することにより、高精度な測位情報が常に得られるようになります。これにより、準天頂衛星「みちびき」が、防災、自動走行、農業/林業の高度化などのさまざまな産業・サービスの基盤になると期待されます。

さらに米国のGPSに依存せずに日本の衛星のみによる持続測位の確立のため、2023年度を目途に7機体制を確立する予定です。



H2Aロケット34号機
「みちびき2号機」（準天頂衛星）
平成29年6月1日（木）9時17分46秒
種子島宇宙センター 大型ロケット発射場
三菱重工株式会社/JAXA

準天頂衛星利活用に係るPRビデオ http://qzss.go.jp/overview/download/movie_qzss.html
準天頂衛星打ち上げ特設サイト <http://michibiki.space/>

JAXA筑波宇宙センター、国土地理院の視察（6月20日）

G空間情報活用推進特別委員会では、準天頂衛星4号機を試験しているJAXA筑波宇宙センター、及びG空間情報の基盤となる基盤地図情報作成や電子基準点の整備・運用を担当している国土地理院を視察しました。

JAXAでは総合環境試験棟のクリーンルームで6.5m×2.8mの準天頂衛星4号機の実物を前に説明を受けたほか、宇宙ステーション運用棟で有人宇宙技術センター長の若田宇宙飛行士から国際宇宙ステーション、日本実験棟「きぼう」や宇宙ステーション補給機「こうのとり」の説明を受け、国際宇宙ステーション滞在時のエピソードなども紹介して頂きました。

続いて国土地理院を訪れ、測定の基準となり、また火山監視や4つのプレート上に乗っている日本列島の地殻変動監視に使われている電子基準点の説明を受けました。この電子基準点データはリアルタイム高精度測位に必要な補正情報の生成にも使用されています。

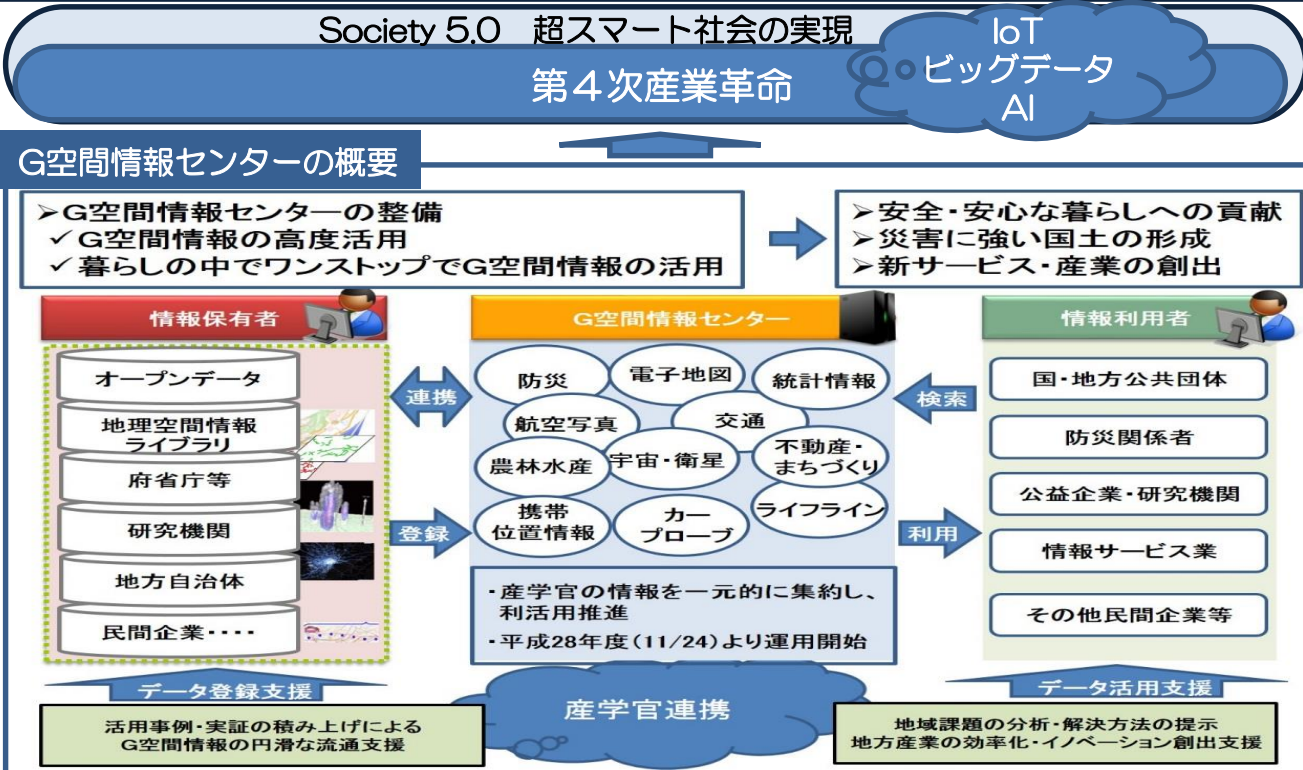
この視察のために準備や説明して頂いた内閣官房、内閣府、文部科学省、国土交通省、国土地理院、JAXAの皆さま、ありがとうございました。



準天頂衛星4号機

電子基準点

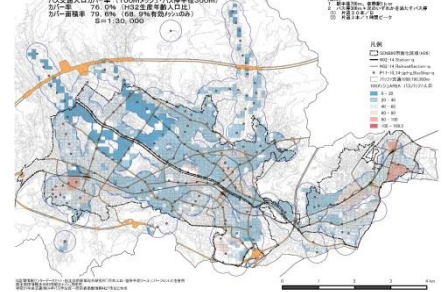
社会実装事業進捗状況「G空間情報センター」



昨年11月に運用が始まったG空間情報センターは、6月末現在で585データセットを登録、登録ユーザー数1,724人、訪問者数7,000人/月、閲覧数70,000/月、ダウンロード数1,400回/月となっています。

ダウンロード数の多いデータは、国が提供する将来人口・世帯予測ツール、南海トラフ地震等の断層モデル・地震動データ、自治体や民間の地形データであり、民間企業、大学・研究機関のほか、国・自治体からもダウンロードされています。自治体での活用事例としては、右図に示すように「将来人口・世帯予測ツール」による生産人口分布とバス停データを重ね合わせ、今後のバス路線及び都市機能の配置検討に活用した例がありました。

自治体によるデータの分析事例



また、災害時に情報ハブとして機能できるよう、地図・地形データや流動人口データの保有者、被害情報把握地図作成などを行う災害情報ボランティア団体と災害時情報提供・利用協定の締結を進めており、今後も国の防災機関等との協定の締結、連携を進める計画です。

普及活動として、自治体や学会が主催するセミナーや機関誌等でセンターの活動状況について紹介を行っています。5月には、オランダ王国インフラ・環境省13名の視察を受け、日本国内のみならず、海外からも注目されるプロジェクトとなっています。

今後の計画としては、国機関保有のデータの拡充を引き続き進めるとともに、地方公共団体のオープンデータ等の登録を進めていきます。地方公共団体には、オープンデータ以外にも様々なG空間データが存在しており、それらをどのようにして流通させ、活用を促していくかが課題です。センターにおけるデータの拡充と利活用の促進に向け、引き続きご協力のほど、よろしくお願いいたします。

